



# ばいりん



令和8年10月号

横浜市立梅林小学校

TEL 045-773-0341

FAX 045-772-4862



## ひきつける

校長 安達 修久

「秋の長雨」というにはあまりにも長く雨の降り続く9月でした。大雨、台風などにより8月に続いて千葉、そして横浜市内や神奈川県内にも被害があり、ところによっては痛ましい事態になっていました。被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。シルバーウィークの時期に感染症の流行や台風の通過もあった中、子どもたちが連休を十分に満喫できていたならよいな、と思いました。

本校で子どもたちに育成を目指す資質・能力のいちばんに「主体的に考える力」を掲げています。学校で学ぶ様々なものごとについて、自ら課題を見つけ計画性や見通しをもち、粘り強く考えながら解決を図ることを通して、子どもたちが学力だけでなく先々まで生きて働く力を身に付けることをめざしています。国語や算数、実技教科などの一つ一つについて、このように取り組めたら何も言うことはありません。しかし実際には一人一人興味をもつ対象も多様で、得手不得手もある子どもたちが、一様に主体的に学習に臨むのは難しいことです。授業での投げかけの工夫、みんなで一緒に活動する楽しさや、子どもたち自身の「学習しよう」という意欲に負うところが大きいのです。

絵本作家かこさとしの著作「未来のだるまちゃんへ」(文芸春秋)に、かこさんが若いころ、子どもたちをひきつけるのに大変苦勞したというくだりがありました。子どもたちが集まる場に、紙芝居を作って見せてやろうと意気込んだのです。

ここはひとつ、これまでの経験を生かして、紙芝居をつくって見せてやろう。うんと芸術性の高い作品に仕上げて、子どもたちをあっと言わせてやろう——。(中略)

「どうだ、こんな素晴らしい表現はないだろう。これを観たら、どんな子どもでも小躍りして喜ぶはずだ」

鼻息荒く意気込んで出かけて行ったのですが「はずだ」が、まったく「はずではなかった」んですね。

いざ紙芝居を始めてみると一人へり二人去り、いなくなってしまうのです。

ショックもショック、大ショックです。

子どもたちは紙芝居が退屈で、原っぱのヤンマや川のザリガニのところに行ってしまうのでした。この後かこさんは、子どもたちが何に興味があるのか、何になら食いつくのかをそばで対話しながら観察して、徹底的に調べていきます。その成果が、数々の子ども心をひきつけてやまない素晴らしい作品に表現されたのでしょう。

さんざん準備して「これなら生き生き学ぶはずだ」と思って授業に臨んだら、子どもたちがまったく食いついてこなかった、あまり楽しいとは言えない授業になってしまった…。教師の授業づくりにもこのようなことがよくあります。子どもたちとの対話を通して、どのように進めたら楽しい学びとなるのか、主体的に考える授業にできるのか。日々そのような工夫をしながら、教師たちは教育活動を進めています。その中には難しいこと、面倒なこともあるかもしれませんが、子どもたちには課題に粘り強く取り組む姿勢を、学力とともに身に付けていってほしいと思っています。